

【特集：LD-SKAIPによる学習の評価と支援】2020年度公開講演会 講演録

学習支援の地図

小 貫 悟

学校の中には、多くの読み書きの基礎学力の習得で苦しんでいる子たちがいる実態があります。しかし、教育システムも、現場での動きでも、なかなか支援が進みません。発達障害の支援が様々な形で進む中で、私個人は、特に「学習障害」の問題は「取り残されている」、あるいは「静かに苦しんでいる」発達障害である」というような表現をするようになってきています。

こうした子に対しての「教材」をどう作るかというテーマで、どれだけの方に興味をお持ちいただけるのかということを考えていたわけですが、今回、予想以上に、支援のきっかけを少しでも掴もうと思っていただけている方が多いのだと感じて、ありがたく思っています。

今回、ここで紹介する概念図を「学習の地図」と呼んでいる理由をお話しさせていただきます。今回の講演会は3部構成になっていまして、1部でこの話を聞いて頂いて、2部、3部でかなり具体的な情報をお伝えしていくという形になっています。2部がメインでありますので、ここでは、その全体感を「地図」と称して、教材をどのように作っていくか、教材をどのような形で捻り出すかを中心に話します。

皆さん聞いたことがあるのでしょうか。「LD-SKAIP」というツールがあります。日本LD学会で開発プロジェクトが組まれて作られたものです。文部科学省の委託で補助費を頂き、学会も開発費を投入する形で学力アセスメントツールと

して開発しました。多層な構造からなっている道具で、この中の「ステップ3」部分は、本日、紹介する学習支援の地図の基礎理論を下敷きにして作ったものです。

地図の意味

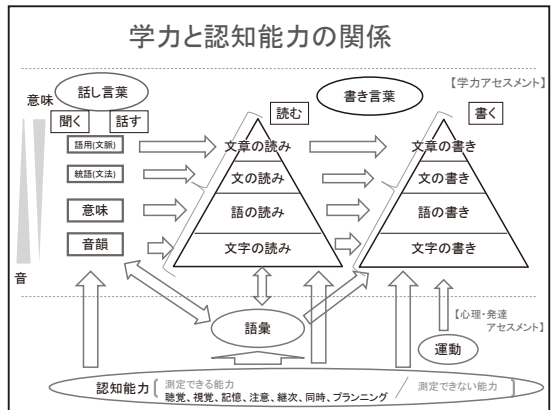
さて、私が「地図」という言葉を使った理由をもう少し説明させていただこうと思います。特別支援教育の領域では、随分前から使われてきた言葉があります。それが「トップダウン」「ボトムアップ」です。「ボトムアップ」とは、底上げ、つまり一番基礎のところから上に積み上げて学習する形を意味します。いわゆる教科教育はそういうふうになっていきます。例えば、買い物ができるようになるためには、まず「足し算ができなくちゃ」そして「繰り上がり繰り下がりも」と、さらに「引き算」「できればかけ算もできたほうが便利じゃない？」といったふうにして、1年生、2年生、3年生の算数を積み上げていくことで、買い物できるレベルまで育てるわけです。ところが、買い物をするということに、本当にそのような積み上げが必要なのかという問題があります。買おうとしている値段より大きなお金を出すことができれば、現実の買い物はできるのですよ。つまり目的が果たせる。そうすると目的があって、そこに一番近いところから考えていくのはどうだろうか、ということになるわけです。これが目的から

必要なことを見つけていく考え方、つまり「トップダウン」です。どちらも正しい教育のアプローチなわけですから、どちらが良いというわけではないのですが、少なくとも「ボトムアップ」で行くにしても「トップダウン」で行くにしても、スタート時点からゴールまでの「地図」が必要になります。

たくさんの発達障害があるお子さんの親御さんの一番の苦しみは何だろうと考えてみると、その一つに、「何となく未来が見えない…」ということがあるのではないかと思います。「この子は算数が得意だから、理系に行くのかな?」「仕事ではコンピューターをやるのかな?じゃあ、いつパソコンを使わそうかな?」というようにして子育ての未来をイメージすることが、その現段階の学習方針を決める支えになるわけです。ところが「明日どうしよう」「来週どうしよう」「来年どうするのだろう」と、先が見えない中で、日々の様々なことについて対応していかなければならない状況があります。そんなときに、見通しを示す「地図」があると「ちょっとこれは置いておいてもいいじゃないか?」「今はこっちを先にやっておこう」「こういう道もあるし、こういう道も色々あるよね?」というように、「地図」があれば色々な形で安心して、あるいは安全に進んでいけるわけです。今日お見せしたいのは、学習支援を行うにあたって、どこから始めて、どこに到達しようとしているのかを迷わず進むための概念図ということになります。現実には、地図に示されたそのままになるわけではないです。地図を見て行きたけれど、その現場は違うということは容易にありうるわけです。しかし、地図がないところを歩いている不安感をイメージしてみてください。やはり、地図は欲しいですね。これをなんとか提示したいというふうに考えているわけです。こういった地図を使ってLDを含む学習に苦戦する子の学習支援の方向性や教材選択をしていこうというわけです。

学習支援の全体地図

まずは、学習支援の全体地図をお見せします。



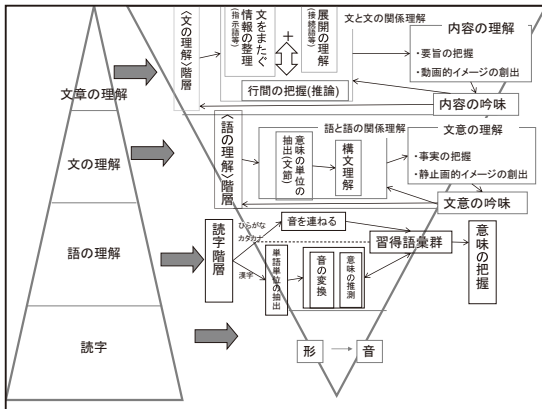
この図の下部には、見えない領域のアセスメントがあります。「認知能力の偏り」であるとか、「語彙量」あるいは「手先」です。こうした水面下の問題が、目に見える学力である「聞く・話す・読む・書く」の部分に大きく影響するわけです。さらに、そうした領域の学力もさらに階層構造を成しています。「一文字が読めないのか」「単語が読めないのか」「文が読めないのか」「文章が読めないのか」と個々の学力状況をも図のような層構造で捉えたいわけです。そのとき、当然、下部の層が上の層を支えています。ですから、あくまで土台が出来て上部が積みあがるように思えます。しかし、実際には、一文字一文字の音読はできないけれど、文章を黙読で理解することはできるといったような上部の層の方がよくできる逆三角形のような読みの問題・読みの課題を持つ子もいます。あるいは、一つの層だけが良くできて、他の層が貧弱であるようないびつな構造になったりしています。その子の学力の不適應の中心は、文字の層なのか、単語の層なのか、文の層なのか、文章の層なのかを、いかに特定して進んでいくかということが大切になります。

さらに横の繋がりもあります。図の最下部にある「語彙量」が少ない場合に、たくさんお話する機会を作るなどをすると、その子の語彙量が増えるように思うのですが、ある年齢になってくると

「読書量」がすごく影響してきます。たくさん読める子は面白くて本を読むから、語彙量が増え、語彙量が増えるから、もっと読む本も増える。このようないい循環になっていくと、語彙量がどんどん増えるわけですが、この逆もある。我々の周辺にはそういう子も多いわけです。学習に苦戦する子をアセスメントする際には、このように、関連する様々な能力全体のなかの関連をしっかりと見るようにすることも大切になります。

読みの学習支援の地図

次の図は「読みの学習支援の地図」です。「読み」の学習支援で課題になりやすい部分を明示する指導階層モデルにしたものです。「今、ここをやっているよ」「ここをやることによって、どこと繋がるよ」というような読み指導のポイントの関連が見えてくるといいなと思いつつ作り上げたものです。



この研究センターに非常に関連がある Tandem (タンデム) という事業プロジェクトが進んでおります。インターネットで Tandem、または学習障害・Tandem 等と入れて頂くと、この地図の解説文が出てきます。それと繋げて読んで頂くことができます。さらに、そこには教材サンプルもあります。是非、ご参照ください。

まず、地図の文字階層をご覧ください。文字というのは単純化すれば「形」を「音」にする作業です。LDのない子は平仮名ならパッと読めちゃう

わけですが、そこにつまずく子に何が起きているのかと思うと、形につまずいている子もいるし、音につまずいている子もいます。一体、どちらに問題の原因があるのかなとみる必要があります。

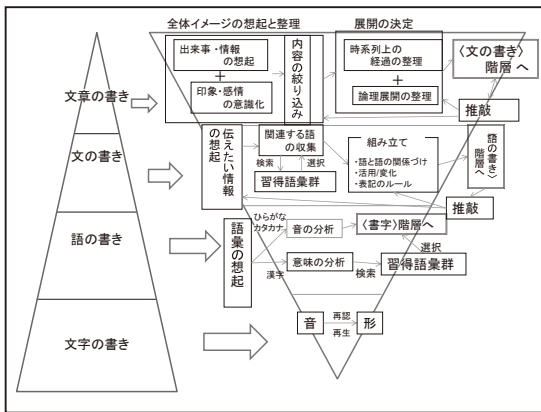
さらに「単語の読み」になると、平仮名だったら、みかんであれば「み」と「か」と「ん」を繋げて「あ、あのオレンジ色の果物だな」とイメージできれば、「みかん」を読めたことになります。一方で、漢字は送り仮名、それから熟語で単位を抽出しなければいけません。例えばこのモデルのような「かいそう (階層)」という言葉、皆さんは段階状になっている「階層」をイメージして下さっているとと思います。しかし、音だけで言えば、ワカメだって「かいそう (海藻)」だし、マラソンランナーが「かいそう (快走)」しているし、タクシーが「かいそう (回送)」しているし、昔のことを思い出しながら「かいそう (回想)」もする。このように、読んだ音に対して、色々な「意味を推測」し、自分の中にある辞書の中にその語彙を持っているかどうか意味把握に繋がるということになるわけです。こんなふうに、一言で「単語の読み」と言っても、すごく複雑になっていきます。それぞれの作業が出来ている子なのかどうかと、分解してチェックしてあげたいのです。

さらにこの地図の使い方、ぜひ知っていただきたいなと思うことがあります。例えば「文字」を読めない子や漢字が苦手な子がいるとします。その子にその学年の配当漢字の30個の漢字を、何とか覚えさせようと指導しそれをクリアできたとします。でも残念ながら、学年が上がっていくとまた新たな漢字が30個出てくる。さらに、1年経つと、また30個出てきます。90個も3年間で読める漢字が増えたのだからすごいと思います。しかし、その子は、文章での物語は全然読めないなんてことも起きるのです。結局、我々が目指しているのは、文章を読める力です。これが生活の中で使われる「読み」です。そこからのトップダウンで指導内容は考えなければなりません。ですから、このモデルの中の階層では、出来るだけ上部の階層の指導を行い、それをしつつ下部の

階層での問題をカバーしていくように指導を組み立てたいのです。階層モデルは「上は下を含む」特徴があります。ですから、あたかも文章の指導しているように見えて、その中で文字の指導をしているということもできるのです。

書きの学習支援の地図

書きの地図もあります。文字の書きについては「音」を「形」にするところで先ほどの反対になります。通常、「書き」というのは頭の中にあることを文字として「再生」する作業です。しかし、そのように書き出すことが苦手な子は、いくつかの漢字の中からこれだと決められる（選べる）「再認」の力がつけるという作戦もあります。つまり、ワープロを使うための力です。ワープロは文字を書く際には「再生」を必要としません。いくつかの候補から、どの漢字かな？と「再認」させる道具なのです。これからの時代は再認によって「書く」ツールを前提に学習支援していくことも必要です。



ところで文字の書きにおいて「再生」はなぜ可能なのでしょう？そこで大きな役割を果たすのが「筆順」になります。頭が覚えているのではなくて手が覚えている。「あれ？この漢字、どのような漢字だったかな？」と思った時に手を使って書いてみると「あ、そうだそうだ」と思いますね。そうすると、再生が苦手な子について、その後の支援の成果を予測するにあたって筆順の学習がう

まくいくかどうかは大問題なのです。筆順という大きな道具を持てるか、それは無理なのか（であれば、再認を前提で指導するか）といったアセスメントも必要になってくるのです。このように、地図の中の1つ1つで色々なことを考えなければなりません。

さて最後にスライドを用意してみました。

「われわれがなにかをよんだりするときに からしなずも、きんちとせいかくによんでいるわけではないのです。かなり、いかいげんにだいたいよんで、でも、きちんとかいはしているのです。だから、がくしゅうのかていでこまかなつまずきがあるからといって、そのつぎのだんかいにすすめないなどということはないとかがんえていいのです。」

いかがですか？皆さん読めますか？なんか不思議ですね。読めそうですね。「我々が何かを読んだりするときには、必ずしもきちんと正確に読んでいるわけではないのです。かなりいい加減に、だいたい読んで、でも、きちんと理解はしているのです。だから学習の過程で細かなつまずきがあるからといって、その次の段階に進めないなどということはないと考えていいのです。」となんとなく読めますね。でも、これは国語の作文としては0点です。しかし、これを書いた子は「文章が書けない」と考えるのかどうかは微妙ですね。この子はちゃんと伝えたいことを持っている。そして、その伝えたいことが、実際に伝わりました。この文章が生まれてきた理由や意義はあったわけですね。この例は、これからの学習支援はいつも「トップダウン」で考えていきましょうというお誘いになります。もしかすると未来には、こうした文章のミスは、全部「AIワープロ」が直してくれるようになるかもしれません。子どもが「勉強なんて二度としたくない、やりたくない」というような、二次障害を起こす前に、もう一歩手前の状態で、我々が何を伝えていくのか、どのような教材を使って、どのような体験をさせておくかと

いうことを考えるのが、その子の将来を前提にした（トップダウン）学習の視点では、とても大事なことになってくるのです。

学習支援に関して「トップダウン」と「ボトムアップ」を自由に行き来できるために、ここでは地図という言葉を使いました。どの教材を選び、どう積み上げていくかを考える際には、生活や人生の充実を目指さなければなりません。教材とは、常にその子が自身の成長を実感し、将来に希望が持てるようになるための装置であることを、我々としては提案したいのです。